



すべての子どもに 木のぬくもりを

北保育園建て替え事業と「木育」の取り組み

北保育園建て替え事業と共に

園舎の老朽化に伴い、平成26年2月より始まった北保育園建て替え事業。いよいよ、平成29年3月の完成まで残り10か月足らずとなりました。

一方で、この建て替え事業をきっかけに、平成27年度は町内の3つの保育園で「木育活動」が始まり、さまざまな取り組みをおこないました。今回の特集では、この「木育活動」について紹介します。

木と触れ合える園に

北保育園建て替え事業の基本構想の中に、「木と触れ合える園に」というものがあります。タイム技研(株) 社(大町) から間伐材提供の申し出があったこともあり、子どもに自然のぬくもりを与えるような園舎にしたいという基本概念で建て替え構想が進められました。タイム技研(株) 所有の岐阜県関市の山

「21世紀創造の森」から伐採され



▲木を曳く様子

た間伐材を利用し、外観は中小口地区の歴史にちなみ「武家屋敷風」にすることが決定しました。「21世紀創造の森」から間伐材を切り出す作業においては、「木こりプロジェクト」が立ち上がり、実際に切り出しの現場を目にしたり手伝いをさせてもらったりしながら自分たちの保育園への愛着を深めました。

そのような過程で、現場の保育士の中から、町立の保育園は約40年前から木で作った手作りパズルを取り入れてきたということ、大町町は自然豊かな町であるということから、今一度「木」というものを意識し、保育に生かすことの意義を確認したいという思いが起ころ、「木育活動」への勉強会へと発展しました。

※北保育園が立地する中小口地区には小口城址があり、保育園の西側には、小口を通過して犬山城へと通じる「織田街道」の名残があります。また、この地区の道路は狭く入

り組んでおり、小口城の城域の名残りと考えられています。

「木育」とは

「木育」とは、北海道庁が主導して提案された新しい教育概念です。公式には、平成16年に発足した「木育推進プロジェクト」から始まりました。世界でも有数の森林大国である日本。また、太古から木造建築を発達させ、生活の中に木を取り入れてきた日本。改めて日本の豊かな資源を生かす意味でも、身近なところから暮らしに木を取り入れていくという運動の中で、子育てに木を生かす取り組みが始まりました。

木は子どもの五感に働きかけ、感性豊かな心の発達を促すこと、また木の生命を感じることで、すべての生き物に対する「命の恵み、大切さ」を自然に理解することができるようになることが報告されています。北保育園建て替え事業をきっかけに、この「木育」を取り入れ、保育方針の主



▲パネルを使って身近な自然について理解を深めました



▲大口町立北保育園（講堂）

要なテーマとし、ゆくゆくは「木育」を柱とした子どもとの関わりが地域全体に広がっていくよう働きかける取り組みが始まりました。

大口町の「木育」

この取り組みが、「保護者や企業も含めた地域の方々」につながるきっかけとなるよう、「27年度木育計画」が完成。「職員の木育研修」「職員と地域の方との木育カフェ」「職員と子どもたちと地域の方との木育活動」という3本柱で活動が進められました。

①職員の木育研修

職員は、木育研究の先進地である岐阜県立森林文化アカデミー教授松井勅尚（しきむらじ）さんから、「葉っぱのペンダント」「マイ箸」「スギの箱



▲広い廊下

椅子」の制作を通し、木から受け取ることでできるパワーや効果についてレクチャーを受けました。また、「木育」を実践している美濃市の2園（牧谷保育園、美濃保育園）や東京おもちゃ美術館（新宿区四谷）を視察し、実際に子ども保育や教育に木を生かした取り組みを学び、大口町の「木育」の参考としました。

②職員と地域の方との木育カフェ

まちの宝である子供を地域全体で育てていくために「木育カフェ」（全5回）を開催。

参加者は保護者、地域自治組織のみなさん、子育て支援団体、児童厚生員・行政職員、保育士。「あったらいいな 人・モノ・こと」「あったらいいなこんな場所」「あったらいいなこんな園舎・園庭」など

をテーマにざつくばらんにトークを繰り広げました。最初は初対面で硬くなりがちだった表情も、終わるころには徐々にやわらいでいき、「できごと」とは手伝つよ」「自分はこのことで協力できるよ」などという提案も。「子どもを真ん中にしたまちづくり」のきっかけを築くことができました。

③職員と子どもたちと地域の方との木育活動

「21世紀創造の森」に年長児、木こりプロジェクト、北保育園園建設推進室のメンバーが遠足に出かけました。タイム技研（ついでけん）のボランティアがおこなっている木の間伐のための伐採作業を見学したり、運搬作業を体験しました。切り出した木材を園に運び、皮はぎの作業をして運動会の入場門に利用しました。また、北保育園建て替えのシンボルツリーにするた



▲遠足の様子

めに切り出した大木の一部を使ってチェーンソーアートを見せてもらったり、「オイスカ」の森のつみ木広場を体験。つみ木シャワーを浴び、森のつみ木広場と称し1万個のつみ木で遊び、また親子共同作業でマイ箸を制作したりしました。

「木育」と出会ってから1年

この一年の木育活動で、子どもたちの間には目に見える変化が…。

木を見ると、「この木は生きているの?」「葉っぱが落ちると木はどうなるの?」と、生命に関する疑問を口にしたリ、木を切った後には、木の香りをかく動作をするようになりま



▲マイ箸づくり

した。「木育」では「木を切ることで木から命をもらう」という考え方をしますが、子どもたちの中に自然とそのような考え方がしみこんできたような気がします。

また、マイ箸を自分で制作したことにより、制作過程においてお互いに協力することを覚え、マイ箸を



▲森のつみ木広場

際に使うことにより道具を自分で管理し、大切にすることが芽生えました。朝、登園すると自主的にマイ箸を忘れずに持ってきたかどつかを確認したり、正しい持ち方や箸を噛まないことを意識したりするようになりました。また、使用後は自分たちで進んで洗っています。



▲廃材を使った堀尾跡公園のジオラマ制作

取材にて

「木育」が始まってから1年。ゼロからのスタートでしたが、知れば知るほど保育士のみなさんの間には、保育士同士の連携と、10年先を見据えた保育の目標が芽生えてきたとい

います。木には、「森林浴」という言葉があるように、接しているだけでも体が冷えない、情緒が安定する、マイナスイオンが健康に良いなどのよく知られた効果がありますが、その他にも、子どもが毎日の生活において創造力を生かして積極的に行動できるようになったり、友達同士の関わり合いで優しく思いやりをもてるようになったり、生き物に対する慈しみの感情をもてるようになったりなどの期待以上の相乗効果があり

ました。これは、「生き物」だけがもつ「生命のパワー」といえるものではないでしょうか。

「木育」から始まった地域との関わり。木育カフェに集まった人々は、初めは顔も名前も知らない相手だったのにも関わらず、「まちの宝である子どもをみんなで育てよう」という共通の目標や願いにより、思いがけなく強い連帯感が生まれ、地域が丸となった温かいコミュニティを形成するきっかけとなっています。

中心となって活動されている保育士のみなさんは、「成果が表れるのは何十年先かもしれませんが、未来の子どもたちのためになる活動をすることは、私たちにとって誇りであり、また使命でもあります。」と胸をはっておられました。

「子どもが健康なまちは、未来のあるまち」「子どもたちの元気な声がかきこえるまちは、まち全体が元気」といいます。今後も、木のパワーを借りながら「木育」がどのように発展していくのか、まちの生命の源である子どもたちがどのように成長していくのかを長い目で見守り、地域全体で子どものためにこのようなことができるのかを改めて考えていきたいと思